

# 地震と図書館

## —震災文庫を眺めて—

撰 正弘

3月11日の地震から約3ヶ月が経過しました。義援金やボランティア活動など、被災地への支援が続いています。図書館は災害や被災地とどのように関わっているのでしょうか。

例えば、大学図書館の中には、被災した大学の学生や教職員に無料で図書館を利用させるところが出てきています。また、被災のため情報や資料の入手が困難な地域に限り、期間限定で図書館による複写物を送るといった動きもあります。

過去にも、災害に対する図書館の活動はありますが、今回は神戸大学附属図書館の震災文庫を取り上げてみたいと思います。震災というのはもちろん、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災のことです。震災文庫では、災害復興や地震研究・防災対策などに役立てたり貴重な記録を後世に伝えるために、阪神・淡路大震災に関わるあらゆる資料を可能なかぎり収集し、全国に広く提供しています。

震災文庫の資料の中には、神戸大学附属図書館のHPで公開されている、来館せずとも見ることが出来るものもあります。デジタルギャラリーのページを開くと、写真、動画、音声、図書、新聞・広

報誌紙、パンフレットなど、多様な資料が揃っています。

写真は約24,000枚所蔵されており、当時の生々しい光景を振り返ることが出来ます。ものによっては、画像を時系列で見られるようになっています。時系列で見られる写真の撮影期間は1995年1月から2002年1月までです。また、定点観測された写真を見比べることもでき、震災から7年間で街がどのように変化したかを参考にする事が出来ます。その他、地域・地点で探すことも可能です。

動画は1995年に撮影されたものが公開されています。音声は、通常運転時では聞けない電車内アナウンス集と、1996年の神戸音風景が収録されています。電車内アナウンス集では、「〇〇から××までは、震災のため電車は運転致しておりません。代替バスをご利用下さい」などのアナウンスを聞くことができます。神戸音風景では、自然の音や祭り囃し、花火大会などの音が録音されています。

図書（に限らず震災文庫の資料）は、「地震災害一般」、「消防・防災」、「市民生活」など16の区分に分類されていて、それぞれの区分でデジタル公開されている資料を読めるようになっています。

新聞・広報誌紙やパンフレットはボランティアに関係するものが中心です。神戸でボランティアをされていた方のコメントを読んだら、「東京ではサリン事件で神戸のNEWSはないとのこと」や「G・W中被災者の自殺の記事を2ケース目にしました。復興という言葉でそういう人たちが隠されてしまっていないかなと心配です」(いずれも震災から4ヶ月後に発行されたパンフレットから)などの言葉に出会いました。これらは過去の出来事ではなく、現代に対する警告のように感じました。

阪神・淡路大震災といえは、もう16年も前の出来事になります。2、3年前に私が神戸の中心部を訪れた際には、外見上は立ち直っているように見えました。しかし、未だに治療を続け、苦しみを抱えている震災負傷者が数多くいると聞きます。また、今も活動を続けているボランティア団体があります。震災の爪あとはまだ残っています。

東日本大震災の被災地・被災者に対しても、長期的な支援が必要になります。出来事を風化させないためにも、同じような災害が起きた時に参考にするためにも、震災文庫のような取り組みには意義があると思います。

●えらぶ まさひろ あまりにも重いテーマでしたが、過去の記録を眺めると、少しだけ希望が見えたような気がしました。